

資料紹介 「互楽荘」案内パンフレット

関東大震災後、山下町には同潤会のアパートをはじめ、いくつもの鉄筋コンクリート造りの集合住宅が造られた。一九三二（昭和七）年に建築された互楽荘もそのひとつであった。「互楽荘」の名称とマークは市民から募集され、横浜貿易新報社が募集に関わっていたため、「驚異と賛嘆の中心」「横浜に新出現の憧れの住居互楽荘」（十一月五日）、「ホテルか一等船室か」（十一月二六日）などと大々的に扱われている。

この互楽荘は、東京日本橋区通旅籠町二丁目の金巾問屋宮崎商店の宮崎庄太郎が、震災前に横浜支店があった場所に建築した。敷地面積四五〇坪、建物は鉄筋コンクリート四階建（四階は一部）、延べ建坪九三〇坪で、コの字型で三方が道に面し、中庭部分には浴場が建てられていた（一階平面図参照、以下パンフレットと新聞記事による）。

部屋の間取りは表1のように二間のものと一間のものがあり、一〇／八畳が二三（別に四階に二）、八／八畳が八、



パンフレット表紙
(井上義弘家資料No.41)



10畳客間(パンフレットより)
家具等は写真のためにセットされたもの

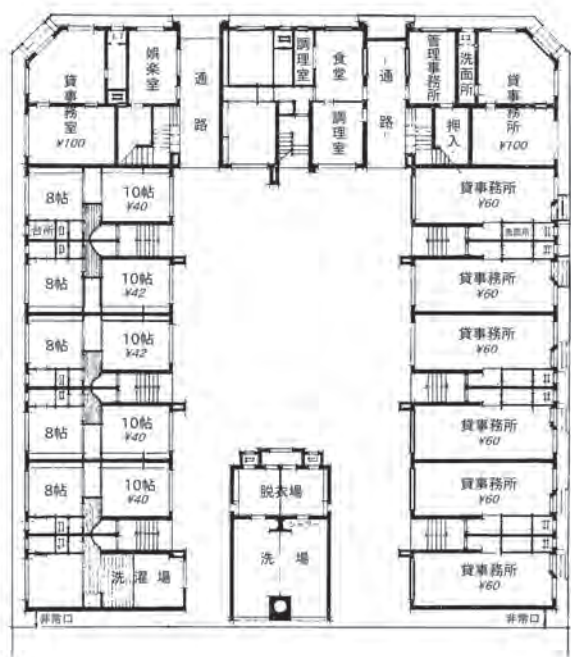
間取り	入会金(円)	会費(円)	
		安	高
10畳・8畳	160	40	45
8畳・8畳	150	36	37
8畳・4畳半	140	35	36
6畳・3畳	120	26	28
10畳	120	25	28
8畳	100	22	26

出典：パンフレットより。

八／四畳半が五、六／三畳が一二、一〇畳が四、八畳が一二、計七二戸あり、他に一階に貸事務所が八あった。パンフレットでは「階段も二戸に一の割合で豊富について居り」、「隣家とはコンクリート厚壁で絶縁されてゐるので話しも洩れず」と謳っている。部屋は「純日本式」であるが、温水式の暖房装置が設置され、また、電話の卓上機や管理事務所にあるラジオを各部屋で聞くことのできる「拡声機」も設置されて

いた。

従来の貸家アパートという感じを除くために、「家主は無い」「居住者相互経営」をたてまえて、入居費用は、保証金を「入会金」として、退会時には利子を付けて返却することとなり、家賃



1階平面図(パンフレットより)
文字は読みやすいように新規に挿入した。
その際、漢数字を算用数字に変更し、銭の単位(総て00)は省略した。

は「会費」とし、入浴費や暖房費、ラジオ・電話の費用も含んだものであった。パンフレットでは、一般的な五人家族程度の家賃以外の諸経費(女中費・電話費・入浴費・ラジオ費など)を四五〜七五円と見積もって、互楽荘では「これらは会費に含まれるので、その御つもりで御検べ願います」としている(表1)。しかし、当時、中区役所の書記七〇人の月平均俸給六八円、書記補三九人は四八円なので入居できそうもない。パンフレットを所蔵していた十全病院歯科医長井上義人は、院長の平均俸給が約三〇〇円なので(『横浜市統計書』)入居できそうである。

その後、一九四〇(昭和一五)年、家賃・地代の統制違反について、基本的に県が摘発するとの記事の中で、基準家賃を無視して値上げをしたとして「まづ槍玉に上」って摘発が報じられている(横濱一月二六日)。戦時インフレの中で諸サービスのコストが高騰していたためであった。

太平洋戦争中には海軍に接収され、敗戦後は米軍に接収された。一九五六(昭和三一)年に接収解除、その後は、またアパートとして使われたが、一九八七(昭和六二)年に老朽化のため解体された。

【参考文献】

- 『横浜・中区史』(中区制50周年記念事業実行委員会一九八五年、読売新聞社横浜支局編)
- 『ランドマークが語る神奈川の100年』(有隣堂二〇〇一年、『図説近代神奈川の建築と都市』(社団法人神奈川県建築士会二〇一三年)。

(百瀬敏夫)

開架資料紹介 『汐見台ニュース』

戦後の市民生活の特徴付ける一つが、「団地」の登場だろう。ここに紹介する『汐見台ニュース』は、神奈川県住宅公社（当時）が建設した汐見台団地を中心に発行された地域新聞である。

市史資料室では一九六五年五月発行の創刊号から二〇〇七年二月の五〇〇号までを借用、マイクロ撮影し、複製製本を作成して開架で公開している。

『汐見台ニュース』は、自治会の会報・ニュースでも、公社の広報紙でもない、住民自身の新聞という編集方針を維持し、様々な情報提供と共に意見交換の場となった。すでに四八年の歴史を持ち、高度経済成長期の市民生活を表す貴重な資料となっている。

創刊時は、神奈川県住宅公社磯子団地事務所発行の『磯子団地だより』だったが、三号から発行主体が神奈川県住宅保全協会磯子サービスセンターとなり、四号から団地の呼称の統一に合わせて、タイトルを『汐見台ニュース』と改め、さらに一九七二年四月、八二号から発行主体が神奈川県団地住宅福祉協会に変わり、現在に至っている。

内容的には、当初は公社のお知らせの類いも多かったが、結成間もない自治会の動向や、整備途上にあった設備面の課題も多く取り上げられている。団地住民自身が参加する紙上座談会は、そうした生活上の課題をその都度取り

上げ、様々な意見を率直に交換することで、住民の関心を高めた。

さらに、この紙上座談会に参加したり、意見を投稿する読者・住民のモニターを随時募集したのも、ユニークな活動であったといえよう。多くの地域新聞やミニ・コミは、特定の少数者によって編集され、論調も単調になりがちであるが、『汐見台ニュース』は早い段階で、読者・住民の参加を募ることで、編集の偏りやマンネリ化を防ぐと努めていたのである。

それでも、住民自身による自治会活動が確立、充実してくるにつれ、自治会活動との重複、地域新聞としての『汐見台ニュース』の存在意義が問われるようになっていった。自治会会報が発行されるようになった一九六九年、創刊五〇号を迎えた『汐見台ニュース』はあえて「廃刊の是非」を問うた。

紙上で読者の意見を募ると共に、読者アンケートも行われた。アンケートの結果、圧倒的に続刊が支持されて、その後も団地住民自身の新聞という編集方針を追求して模索を続けたのである。その間、編集体制は一九七七年からモニター制度を廃して、編集委員制となった。また、創刊一五年を振り返る『コミニティづくり・ひとつの試み』（一九八一年）を発行している。これだけ長期にわたって発行され続けている地域新聞も珍しいが、率直な意見交換の場となったという意味でも貴重な存在といえる。（羽田博昭）

《市史資料室たより》

【横浜市史資料室内ミニ展示】

「声楽家佐藤美子 誕生から昭和20年まで」
～所蔵資料紹介～

日時：展示中～平成26年3月31日(月)
午前9時30分～午後5時
場所：横浜中央図書館 地下1階
横浜市史資料室内展示コーナー
◎入場無料

内容：佐藤美子(1903～1982)は、昭和初期から活躍したソプラノ歌手です。オペラのカルメン役が評判となり「カルメンお美」と呼ばれていました。また、横浜市教育委員等を勤め「横浜市歌」改定に尽力するなど、文化振興にも貢献しました。市史資料室では、御遺族から寄贈された「佐藤美子資料」を所蔵・公開しています。今回は、この中から、1945年以前の資料・写真を紹介します。

《今後の室内ミニ展示予定》
平成26年4月1日～7月中旬(予定)
新収蔵資料紹介
B29搭乗員関係資料

【9/1 展示記念講演会「関東大震災の災害教訓-東京・横浜の比較から」を開催しました。】



この講演会の内容は、『横浜市史資料室 紀要』第4号(平成26年3月末発行)に掲載予定です。

【寄贈資料】

- 1 森 輝子様 昭和4年 天皇行幸の際の記念の文鎮 1点
- 2 丸岡 澄夫様 横浜ペンクラブ会報ほか2件
- 3 田頭喜久彌様 混声合唱曲集 よこはま幻想 1点
- 4 清水 正夫様 北林余志子関内昔話 〔①～⑥〕、写真 1点
- 5 大野 省治様 家賃等受領証ほか7件
- 6 山口 雄三様 横浜文芸懇話会会報No.112～113、116～122ほか1件
- 7 福島 政孝様 駐留軍要員関係資料、記念乗車券 ほか61件

- 8 山根 哲様 アンソニーのカメラ一式
- 9 山田 さち子様「大日本婦人会長者町九丁目班結成記念」の写真1点
- 10 三菱地所レジデンス株式会社横浜事業部様 焼夷弾 1点
- 11 株式会社有隣堂様 有隣堂発行「有隣」合本 1～8各1冊
- 12 新井 寧子様 小学校時代の写真 (昭和初期)4点
- 13 公田町団地自治会様 「公田町団地自治会報」第371号～399号、号外ほか
- 14 井上 義弘様 十全病院歯科医長 井上義人関係資料等202件
- 15 山本 博士様 B29搭乗員関係資料 14件
- 16 井上 久子様 港北区史2冊

資料提供のお願い

昔の横浜を記録した写真やパンフレット、ポスターなどございましたら、横浜市史資料室 045-251-3260へご連絡ください。次世代の市民に引き継ぎます。

◇ 休室日のご案内 ◇

12月24日(火)、12月29日(日)～1月3日(金)、
(1月4日は12時開室)、1月14日(火)、
2月17日(月)、3月17日(月)